様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６３０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０９６６

研究課題名（和文）聖具消費を通したコミュニティ再編に関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）An Anthropological Study of Reorganization of Religious Community through Materiality.

研究代表者
川田　牧人（KAWADA, Makito）

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：３０２６０１１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：聖具消費は、ローカル・コミュニティと、聖具に関する実践コミュニティの両方の再編過程を促進する。ローカル・コミュニティにあっては、自然災害後の復興・活性化の牽引役、あるいは歴史的記憶を共有する基盤となりうる。いっぽう聖具を用いた祈祷の多様性に対応して、接触・舞踊・書承などさまざまな宗教実践のコミュニティが任意に形成される。これらのコミュニティは一部住民から一般市民全般、さらに観光客などの外部者まで、いくつかのレベルで重層的に構造化される。

研究成果の概要（英文）：This study clarifies that consumption of sacred material forwards the process of reorganization both local community and the community of practice which shares various attitudes and behaviors with respect to the sacred material. In a local community, the sacred materials including saint's statues and pictures play a leading role in reconstruction and revitalization after natural calamity, and offer a base for historical memories. On the other hand, depending on the diversity of religious acts of prayer with sacred materials, many communities are structured such as community of “touch”, “dancing”, and “writing”. Within these communities, the range of community of “writing” remains in some part of residents with common skill of literacy. In contrast, community of “touch” is widely spread into general citizen, and community of “dancing” is more spread into outside tourists connected with tourism resources such as city festival and worship for saint’s statue.

研究分野：人文学

キーワード：文化人類学　フィリピン　宗教実践　コミュニティ　聖具

１．研究開始当初の背景

（1）研究代表者はこの研究に先立ち、2011年度から3年間にわたって実施した科研費による研究「宗教実践と消費文化の人類学的研究―フィリピン民衆キリスト教の聖具消費と流通」において、フィリピン民衆キリスト教世界にみられる聖像や聖画、祈禱書などを「聖具」という概念でとらえ、信徒の儀礼への主体的参加や個々人の経験にもとづく宗教知識のカスタマイズなどの側面に光をあてた。この研究を展開させ、聖具消費によるコミュニティ形成という課題へと展開させることが、本研究の直接の背景である。

（2）グローバリゼーションの現代的特質を宗教の側面からとらえると、宗教が公的領域において弱体化し退潮すると予見した世俗化論の再考、さらに宗教の再活性化によって宗教が再選択される状況の重要性が指摘できる。そこでは宗教が大衆消費社会のモードに適合的に受容される側面、すなわち「もの」を通した宗教生活の重要性が拡大しているといえる。

（3）またコミュニティ論の側から、都市化や過疎化などによるコミュニティの衰退に加え、近年では災害からのコミュニティ復興など、現代社会にとってコミュニティの再生は重要な課題となってきた。上記の（2）点目と連動させると、グローバリゼーションや自然災害といった大規模な変動に対する創発的なリアクションを宗教実践のなかに読み取るような学的ビジョンの深化や方法論の検討などが要請されているという社会的背景も見いだされる。

２．研究の目的

（1）本研究の目的は、フィリピン・ビサヤ民俗社会において、カトリックの聖像や聖画など、いわゆる聖具の消費がコミュニティ形成にとっていかなる意義をもつのかに焦点をあて、モノを通した宗教生活、とりわけ可視性・可触性を特徴とする宗教実践がコミュニティの再編や活性化の源泉となる側面についての記述を通して、宗教実践と社会生成の関係性を文化人類学的に考察することである。

（2）具体的な「もの」を通した宗教実践は、コミュニティにとっていかなる意義があるのかという問いは、「もの」の流通と消費という現代グローバリゼーションの特質を宗教の領域からとらえる意義がある。また、近年希求されているコミュニティの再生にとって、宗教の果たす役割を考える上でも、重要な意義をもつ。そこで本研究では、「もの」に焦点化される宗教実践がコミュニティを再編したり活性化させたりする側面をエスノグラフィックに記述し、現代における社会生活のなかの宗教に関する理解を深めることをめざす。

３．研究の方法

（1）聖具消費を通したコミュニティの構造化：セブ市のサントニーニョ崇拝の核となる聖像の流通と消費の様態を明らかにし、実際の崇拝の祈願行動の様態のちがいから信徒の集団がコミュニティとしていかに構造化されるかなど、その成り立ちを理解する。

（2）聖具を通したコミュニティの表象化：聖具を用いた地域シンボルの生成や、メディア表象のされかた、観光資源化などの側面を明らかにする。サントニーニョの祭礼はとりわけ海外からも相当の観光客を見込める優良観光資源であり、聖具を用いてその集客力が増幅する様態に着目する。

（3）コミュニティ間比較調査：同じ聖具を用いても異なる地域間でコミュニティ創造に用いられた場合、何がどのように異なるかを比較研究によって明らかにする。

（4）上記の諸点について、研究方法の基礎をインテンシブ・フィールドワークにおき、フィリピン・ビサヤ地方セブ市を中心として観察調査とインタビューにより調査を進めた。比較対象として、当初は同じビサヤ地方でもイロンゴ（ヒリガイノン）圏のパナイ島を候補としたが、研究の進展にともない方針の一部見直しをおこなった。

４．研究成果

（1）方法1（構造化）に対応した成果

①コミュニティ再編に際して、聖具消費を通してコミュニティがいかに構造化されるかという課題に直結して前提しなければならないのは、調査開始の前年2013年10月15日にビサヤ地方を襲った大地震の影響である。震源地ボホール島ではマグニチュード7.2を記録し、調査対象地のセブでもサントニーニョ信仰の中心であるバジリカのベルタワーが倒壊した。調査開始時点ではそのままであったが、前回の科研で調査した教会公式グッズショップ、教会外壁沿いの売店、露天商のいずれもが聖像販売を再開させ、災害復興やコミュニティの活性化の一助となっていた。これらの事象を通して、自然災害に対するレジリエンスや創発的リアクションのよりどころとしての聖具という主題を再確認できた。

②上記の方法（4）に記した方針の一部見直しにともない、実体的な地域コミュニティのみに限定するのではなく、聖具に関するさまざまな行為を共有する実践コミュニティの構造化へと視点を転じた。具体的にはセブ地方における「祈り」に着目し、声に出して詠唱するという形態以外にも触れる、踊る、書く、といったさまざまな様態に応じた宗教実践コミュニティの構造を明らかにできた。

表：聖具（聖像）を介した三つのコミュニケーション回路にもとづくコミュニティ形成

	触れる	踊る	書く
場所	聖堂入り口付近に安置された聖像群	セブ市内路上／サントニーニョ・バジリカ	聖堂内に安置された聖像
対象	聖堂内のあらゆる聖像	サントニーニョ聖像、もしくはバジリカ	聖堂内の特定の聖像
機会	教会を参詣するたびごと	年一度／毎週金曜日	何らかの「願かけ」の必要に迫られたとき
生成するコミュニティ	接触のコミュニティ（一般信徒）	舞踏のコミュニティ（一般信徒＋観光客）	書承のコミュニティ（特定信徒）
内容	聖像に直接接触する（ハンカチなどで拭う）	ストリートダンス／ロウソクによる祈願祈禱	祈願や定型祈禱文を筆写した紙片を奉納

③ことばに出して唱える以外の祈り方として、上記の三つのコミュニケーションの様態が認められた。「触れる」は聖堂を訪れるたびに安置されている聖像の足許など一部に直接接触する（もしくはハンカチなどで拭う）という行為による祈り方である。「踊る」は、サントニーニョを祭祀するシヌログという都市祭礼において聖像をかざしながら踊るという行為に端的に示される。ただしこれはサントニーニョ・バジリカでのロウソク奉納祈願におけるステップを踏襲しており、ティンデラ（tindera; ロウソク売り）が祈願者に代わってこのステップを踏みながら祈禱を捧げる慣行としても見られる。そして「書く」行為は、自分の祈願や定型の祈禱文を筆写した紙片を聖堂内の特定の聖像の足許に挟み込むという変わったタイプの祈禱方法である。

④これら三つのコミュニケーション回路を通したコミュニティ形成と構造化を考えるならば、もっとも包摂的なのが「踊る」祈りを媒介とした関係であり、これには一般住民に加え外部からの観光客なども参入可能である。次いで「触れる」祈禱行為は一般住民のあいだでは一般的な活動であるが、外部者はこのコミュニティにはなかなか参加しない。そしてもっとも排他的なのが「書く」ことを通した祈禱であり、一般住民の中でも英語リテラシーをもった一部のものだけがかかわる。すなわち聖像をめぐる実践コミュニティは祈禱の方法と対応して、書承のコミュニティ→接触のコミュニティ→舞踏のコミュニティの順に同心円構造の外周に位置するように配置できる。

（２）方法２（表象化）に対応した成果

①アクラン州カリボ町で予備調査をおこない、カトリック聖像をもちいた地域シンボルの創出と観光資源化の実態を概括した。セブ州セブ市でのこれまでの調査資料と対比するならば、当該地域の規模のちがい（カリボは州の中心ではあるが市ではないフィリピン唯一の自治体であるのに対し、セブ市はマニラに次いでフィリピン第二の都市であり、セブ広域都市圏の中心地である）は歴然としているが、サントニーニョ聖像を祀る教会を中心として統合される様態などにおいて、類似性を示すことが明らかとなった。ただし、方法（４）でも述べたように、カリボでの継続調査の方向性は見直し、軌道修正をおこなった。

②セブ市の調査を集中的に実施できたことにより、新たな宗教実践である KAPLAG についても知見を得ることができた。これは 1521 年にマゼラン遠征隊によってもたらされたサントニーニョの聖像が、1565 年にレガスピ隊によって再発見されたことを記念する宗教儀礼であり、かつ歴史再現イベントでもあるが、2015 年が再発見のちょうど 450 周年にあたることから盛大に祝われていた。それまでセブ市においては SINULOG という都市祭礼に限定して調査していたが、新たな研究視点へ転換することによって、歴史的記憶を再現することを通して地域共同体の自己表象化や観光資源化、または SINULOG と KAPLAG 両者の関係の上に立った地域シンボルの生成などの側面にも光をあてることとなり、より立体的に地域コミュニティをとらえる端緒を開くことができた。

（３）方法３（比較）に対応した成果

①申請時には、毎年１月におこなわれるサントニーニョの祭礼（セブにおいてはシヌログ、カリボではアティアティハンと呼ばれる）を比較調査のひとつの焦点としようとしていたが、2014 年４月、この科研の開始と同じ時期に所属機関を異動し、その職場の事情から１月に長期の海外調査をおこなうことが困難となった。その対応として、本研究でいうコミュニティを実体的ローカル・コミュニティにかぎらず、任意の信徒によって崇敬行動が共有される人々のつながりをコミュニティとして設定し直すことにより、上記（1）であげたように、同じサントニーニョ崇拝でも明確に分類・構造化できるような活動内容のちがいを見いだすことができた。

②地域間コミュニティ創造の比較については、同じ聖人であるサントニーニョの聖像祭祀で有名なチェコ共和国プラハの勝利の聖母教会において参与観察調査をおこなっ

た。教会周辺の土産物ショップに関してはセブ市に近い広がりをみせるが、セブ市で観察できたような販売所が同時に聖像の補修や製作にあたる場所は教会周辺にはなく、聖具にまつわる実践コミュニティの成り立ちを対比的にとらえることができた。

（４）以上、3 年間の研究を総括して、以下のようにまとめることができる。聖具消費は、ローカル・コミュニティと、聖具に関するさまざまな行為実践を共有する実践コミュニティの両方の再編過程を促進する。ローカル・コミュニティにあっては、自然災害後の復興・活性化の牽引役、あるいは歴史的記憶を共有する基盤となりうる。いっぽう聖具を用いた祈禱という宗教行為の多様性に対応して、接触・舞踊・書承などさまざまなコミュニティを構造化する。このうち書承によるコミュニティはリテラシーを共有資源として一部市民にとどまるが、接触によるコミュニティ一般住民全般に広範にひろがり、さらに舞踊によるコミュニティは都市祭礼や観光資源としての聖像祭祀と結びついて外部者にまで広がりうる。接触をともなった宗教シンボルの生成とコミュニティの再編という事象からは、「ものと感覚」という新たな課題も見いだされる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）
①川田牧人、個とマテリアリティに験ずる呪術、思想、査読なし、1125 号、2018、120-126

②川田牧人、現代における感覚とマテリアリティの呪術論に向けて、民博通信、査読有、157 巻、2017、20-12

③川田牧人、グローカルな〈生〉を記述することば、社会接触のグローカル研究（グローカル研究叢書)、査読なし、3 巻、2016、15-30

④川田牧人、序論：呪術的実践=知の現代的諸相―科学／医療／宗教／その他の実践=知との並存状況から、Contact Zone、査読有、7 号、2016、159-166

〔学会発表〕（計　２件）
① KAWADA, Makito, When orasyones meet modern literacy: Prayer in the words and writing of the Visayas, Philippines., International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES), 2016

②川田牧人、途惑う呪者―科学と呪術をめぐる信念世界の描き方、日本文化人類学会中国四国地区研究懇談会、2015

〔図書〕（計　３件）
①川田牧人　他、明石書店、フィリピンを知るための 64 章、2016、399-399

②川田牧人　他、東京外国語大学出版会、人はなぜフィールドに行くのか、2015、154-171

③KAWADA, Makito et.al (eds.) Center for International Studies Publications, University of the Philippines, Visayas and Beyond: Continuing Studies on Subsistence and Belief in the Islands., 2014, 153

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
川田　牧人　(KAWADA, Makito)
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：３０２６０１１０

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)